阿南市の方言

方言班（徳島県方言学会）

峪口有香子[1*]　岸江　信介[2]　仙波　光明[2]

要旨：阿南市の方言は，音声上の特色としてシェ［ʃe］，ジェ［ʒe］が高年層では今なお濃厚に残っている。一方，カ行およびガ行合拗音クヮ〔kwa〕・グヮ〔gwa〕は高年層の間でも消滅寸前の状況となってきている。ガ行・ダ行の入りわたり鼻音は確認することができなかった。文法面では，断定の助動詞は，「ジャ」が優勢だが「ヤ」の使用も目立って現れることが確認された。否定の助動詞では「ヘン」が認められるようになり，大阪化が進んでいるようである。一方，語彙面においては，伝統的語彙を数多く残していることが判明した。

キーワード：うわて方言，伝統的音韻，大阪化，古語の残存，民俗説話

1．はじめに

今回の調査では，文法・表現法・語彙・アクセントのほか，自然談話の収録を行い，そこに現れることばを分析した。談話資料に重点を置いたのは，できるだけ自然な形で阿南市の方言の特徴を詳細にみたかったためである。調査は2013年８月に見能林公民館・加茂谷公民館，2014年８月に新野公民館，桑野公民館で実施し，話者は生え抜きで60歳以上の方々を対象とした。

2．方言区画上からみた阿南市方言の位置づけ

森（1982）の徳島県の方言区画によると，**図１**に示したように，阿南市は，「うわて」に属している。「うわて」は，那賀川・勝浦川流域を中心とする地域をさす。その東端は小松島市・阿南市で，これら地域を「うわて里分」，また，勝浦町南部・鷲敷町・上勝町・上那賀町東部・相生町を一括して，「うわて中分」と呼んでいる。

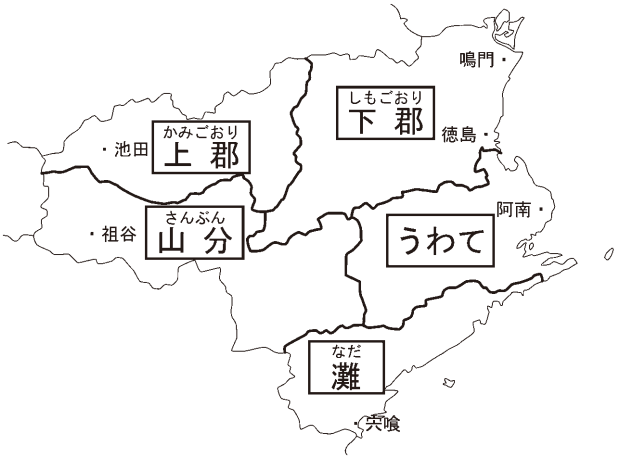

図１　徳島県における方言区画

3．音声・音韻の特徴

1）シェ［ʃe］・ジェ［ʒe］

国立国語研究所編（1967）『日本言語地図』によ

1　徳島大学大学院地域科学教育部博士後期課程・JSPS Research Fellow
2　徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
＊　771-8502　徳島市南常三島１－１　naminyuka@hotmail.co.jp　088-656-9309

ると，徳島県は一部を除いて，ほぼ全域でセ〔se〕がシェ［ʃe］と発音されると報告がされている。かつては，セ〔se〕がシェ［ʃe］，ゼ〔ze〕がジェ［ʒe］と発音されるのが，西日本方言の特徴の一つであった。森（1982）によると，「うわて・下郡の地方で［ʃe］・［ʒe］になりやすい」と報告されている。全国的にみても，口蓋化したシェ［ʃe］・ジェ［ʒe］といった音声も共通語化によりセ［se］・ゼ［ze］となりつつある。しかし阿南市において老年層では，自然談話によって以下のような使用が観察できた。

1．ミンナ　シェンシェイ　シェンシェイ　ッテ　ユーテクレテ　ホコデ　トマッタ　バッカシニナ。（皆な先生，先生って言ってくれて，そこで泊まったばっかしにな）
　見能林町80代男性
2．アサガッコーイッタラ　シェイネンダンガ　アツマッテネ。（朝学校に行ったら青年団が集まってね）
　新野町80代男性
3．ジェンジェン　ナカッタンデスヨ。（全然なかったのですよ）
　橘町70代女性

2）クヮ［kwa］・グヮ［gwa］

カ行・ガ行合拗音であるクヮ［kwa］・グヮ［gwa］（火事［kwaʒi］，外国［gwaikoku］，正月［ʃo:gwatsu］など）が急速に衰退していく傾向が窺えるが，今回の新野町調査の自然談話からその使用を確認することができた。

1．クヮノガワガネ　ナガレテイル。（桑野川が流れている）
　新野町80代男性
2．コドモトネ　ショウグヮクシェイノマゴト　オジーサント　タケヤブニ　ホリニイクンデスケド。（子どもとね。小学生の孫とお祖父さんと竹やぶに掘りに行くのですけど）
　新野町60代男性

3）〔d〕〔g〕に伴う入りわたり鼻音

「うわて」や県南の「灘」地域に共通する現象として，ガ行・ダ行の直前に鼻音が現れる，いわゆる入りわたり鼻音は語中のみならず語頭に現れることもあることが指摘されている（宮城1956）。しかし，今回の調査では，自然談話などからも語中・語頭ともに認められなかった。

4）〔s〕と〔h〕の交替

サ行がハ行に変わることをいい，徳島県において代名詞の「ソレ」が「ホレ」と変化する。全国的にみても珍しい現象である。

1．ホラー　ツナミワ　アノ　イッソー　ゴツカッタ。（それは津波はあの一層酷かった）
　大潟町70代男性
2．ホンナラ　チリジシンノ　トキワナ。（それならチリ地震の時はね）
　大潟町70代男性
3．ホンデ　ソノジブンワ　イエガ　ヒクカッタカラ　ツカッタケドナ。（それでその時は，家が低かったから浸かったけどね）
　大潟町80代女性

5）アクセント

阿南市のアクセントは徳島市を中心とした，いわゆる徳島市のアクセントとほぼ同じである。

阿南方言のアクセントの類と型の対応関係をみてみると，一拍名詞は１類HH／２類HL／３類LHとなり，二拍名詞は１類HHH／２類・３類HLL／４類LLH／５類LHLとなる。動詞のアクセントをみると，二拍動詞１類HH，２類LH，三拍動詞１類（五段活用・五段活用以外）HHH，２類（五段活用）HLL，２類（五段活用以外）・３類LLHと分別される。二拍形容詞はLH，三拍形容詞１類HHL，２類がHLLというアクセント体系を保有し，典型的な

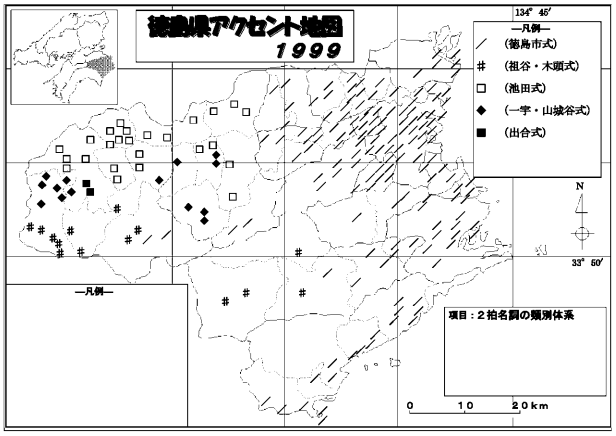

図２　石田・岸江（1999）２拍名詞類別体系

中央式アクセントといえる。

4．文法項目

1）文末詞

文末詞は，訴えの形式である。阿南市において，バラエティ豊かな形式を自然談話から確認することができた。

⑴ 文末詞「ダ」

勧誘・命令・詰問などの意味を強めるのが文末詞「ダ」である。間投助詞や感動詞としても用いられる。

1．シヨッタダ。（したのだよ）
　新野町60代男性

2．ヒラキヨッタダ。（開いていたよ）
　新野町80代男性

3．ムカイノホーカラ　キヨッタダナ。（向かいの方から来ていたよね）
　阿瀬比町70代男性

⑵ 文末詞「ジェ」

文末詞「ジェ」は，「ゾエ」が変化したことばであるといわれている。徳島県で「ジェ」を用いるのは，「うわて」「下郡」であり，阿南市も使用域に入っている。今回の自然談話からは，主に疑問を持ちかけるときの使用が確認できた。

1．ナンボジェ？（いくらなの？）
　見能林町80代男性

2．イツジェイ？（いつなの？）
　見能林町70代女性

⑶ 文末詞「ケ」

主に，疑問を投げかけるときに使われる。「うわて里分」「灘」での使用が多い語である。今回の自然談話の中からは，見能林の女性から確認することができた。**図3**をみても，阿南市に「～ケ」が使用されているのが確認でき，阿南市以南に使用が多くなる傾向がわかる。

1．ノッタリワ　セーヘンノケ？（乗ったりはしないのか？）
　見能林町80代男性

2．コエルグライケ？（超えるぐらいか？）
　見能林町80代男性

3．ホレワ　ホート　アノイエワ　デキトンケ？

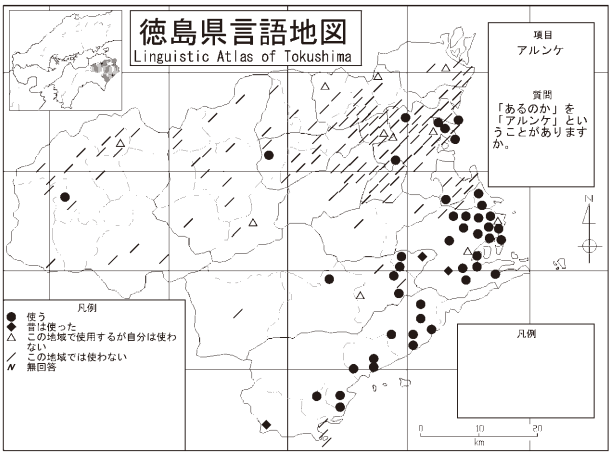

図3　仙波ほか（2002）「アルンケ」

（それはそうと，あの家はできているのか？）
　見能林町70代女性

4．バイパス　イッタラ　ワカルンケ？（バイパスへ行ったらわかるか？）
　見能林町80代男性

5．カンマンケ？（構いませんか）
　阿瀬比町80代男性

⑷ 文末詞「キャ（ー）」

疑問の文末詞「キャ（ー）」を確認することができた。以下に用例を記す。

1．アー　ホー　キャー。（ああ，そうか）
　見能林町70代女性

2．ネタンキャ？（寝たのか？）
　見能林町70代女性

⑸ 文末詞「カエ」

藤原（1985）によると，「徳島県下に「よ」「ね」と言いかえてもよい「エ」が，かなり見られる」と

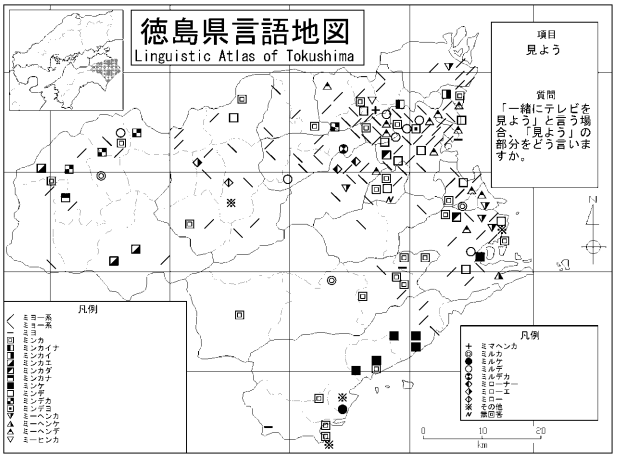

図4　仙波ほか（2002）「見よう」

いう。文末詞「カエ」も「カ」＋「エ」の複合形であり，問いの「エ」の使用が確認できた。

1．ショーワニジューイチネン　カエ。（昭和21年かね）
　阿瀬比町70代男性

⑹ 文末詞「デ」

文末のイントネーションによって疑問・詰問・勧誘ときに強調にも多用される。徳島全県で用いられるが，「下郡」の用法が主である。しかし阿南市においても数々な用例を確認することができた。

1．ヨカッタデ。（良かったね）
　新野町80代男性
2．アンナン　ナカッタデ。（あんなもの　なかったね）
　新野町80代男性
3．アマガエルチュウヤツデ。（雨蛙っていうやつだね）
　新野町80代男性

⑺ 文末詞「ジョ」

徳島県下で多くみられる，「ジョ」は阿南市の自然談話からも確認することができた。藤原（1972）によると「徳島県下などでは，「デヨ」から「ジョ」という文末詞をおこしている」という。

1．アトデコマルンジョ。（後で困るのよ）
　山口町80代男性
2．ヒトワ　ツマンジョ。（人は乗せないよ）
　見能林町70代女性

2）原因・理由の接続助詞「から」

図5によると，徳島県においては，徳島市を中心に「ケン」が有力であり，県西部の山間部では「ケニ」「キン」「キニ」，県南部では「サカイ（ニ）」が使用される傾向にある。阿南市においては，「ケン」が主で，県南にみられる「サカイ（ニ）」の使用は，今回の調査では確認されなかった。

1．ワタシヤバショガ　ヨカッタケンナ。（私たちの場所が良かったからね）
　見能林町70代女性
2．チューシャジョーガ　ナイケン。（駐車場がないから）
　見能林町70代女性
3．オソーニキタケン。（遅くに来たから）
　見能林町70代女性

3）逆接を表す接続助詞「けれども」

阿波弁では，ホナケンド・ホヤケンドが多く使用されている。会話中においても，ケンドの使用が特に目立つ。**図6**においても，ほぼ広域にケンド系の使用が盛んにみられ，当該地域においてもケンド系の使用が確認できる。

1．ホヤケンド　ヒニヒニ　アツイナ。（そうだけれど日に日に暑いな）
　見能林町70代女性
2．ホナケンド　アノカエリノ　アノゴミ。（そうだけどあの帰りのあのゴミ）
　見能林町70代女性
3．ビザンニナ　ツレテッタンヤケンドナ。（眉山にね連れて行ったのだけれどね）
　見能林町80代男性

4）アスペクト

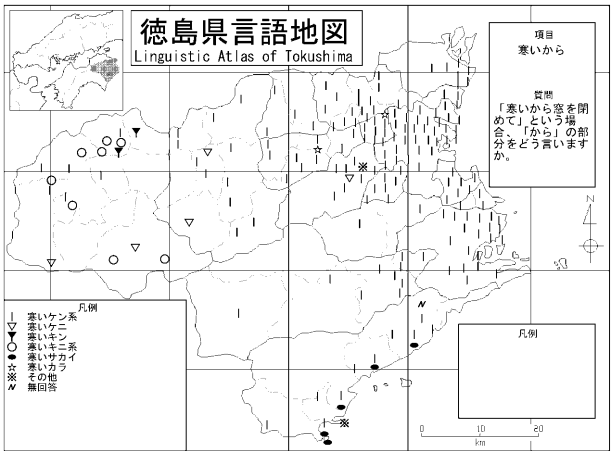

図5　仙波ほか（2002）「寒いから」

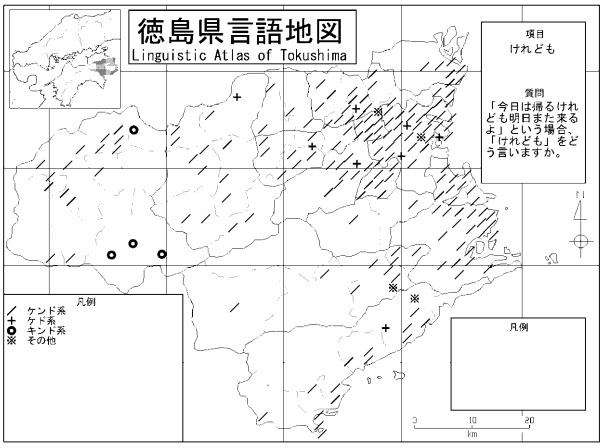

図6　仙波ほか（2002）「けれども」

完了／未完了の区別があり，未完了では「ヨル」，完了では「トル」が基本であるが，動詞の種類によっては未完了でも「トル」で表すことがある。また，「ヨル」「トル」から変化した「ヨー」「トー」のもみられる。否定形の場合は，「ヨラン」「トラン」となるが，一方で，「ヨラン」の場合は，「テヘン」などの使用もみられる。以下，談話資料から使用例を取り上げる。

まず，未完了（進行態）の場合から紹介する。

⑴ 未完了―進行態―

ヨル

ラ行五段動詞連用形が「～ヨル」につづく場合，「降りヨル」が「降ンリョル」「降イヨル」等になることもある。また，「行く」「書く」「空く」などの時には「イッキョル」「カッキョル」「アッキョル」等になる場合がある。「ヨル」の使用例を以下に示す。

1．ピチャピチャシヨル　ミズノナカデトカナ。（ピチャピチャしている水の中でとかね）
津乃峰町70代男性

2．ツナミガ　キヨルユーテナ。（津波が来ていると言ってね）
見能林町80代男性

3．シゴト　イッキョルヒトワナー。（仕事［に］行っている人はね）
見能林町70代女性

トル

1．ダマットルノモミョーヤデ。（黙っているのも妙だね）
見能林町70代女性

2．マダカンガエトルヒトヨ。（まだ考えている人よ）
見能林町70代女性

ヨラン・テヘン

極性（否定）の場合には，ヨランのほか，テヘンがみられる。

1．アンマリ　イーヨランナ。（あまり言わないね。）
見能林町70代女性

2．ソコッチモ　ミエテヘンケド。（少しも見えてないけど）
椿泊町70代女性

⑵ 完了―結果態―

トル

1．チョード　イエ　カエットッタンジャケンド（ちょうど家に帰っていたのだけど）
椿町　80代男性

2．ナナサイデ　ニネンセーニ　ナットッタンカイナー（７歳で２年生になっていたのかなあ）
椿町　70代女性

5）音便

ハ行四段活用動詞の連用形や形容詞の連用形がウ音便の形に変化することは，西日本方言の特徴とされてきた。今回の自然談話からも数多くの使用例がみられた。

1．マダ　メガネ　コータコトナイ。（まだ　眼鏡［を］　買った事［が］ない）
見能林町70代女性

2．デナ　ライネンノコト　ユータラナ。（でね来年のこと［を］　言ったらね）
見能林町70代女性

3．クルマガ　ズート　ツカエテシモーテ。（車がずっとつかえてしまって）
見能林町80代男性

4．ハヤ　カエリタインジャワッテ　オモテ　ミヨンヤケドナ。（早く帰りたいのじゃないって思ってみているのだけれどね）
見能林町70代女性

5．イツデモ　ドンナニ　イソガシーテ　ビックリシテモ。（いつでも　どんなに　忙しくて　びっくりしても）
見能林町70代女性

6）断定の助動詞

会話中から，「ジャ」「ヤ」の使用が確認できた。特に男女差はなく，男女ともに「ジャ」「ヤ」の使用が確認できた。

⑴ ジャ

1．ホージャ　ホージャ。（そうだ。そうだ）
見能林町70代女性

2．ホレワ　エーケンドジャ。（それはいいけどね）
桑野町70代男性

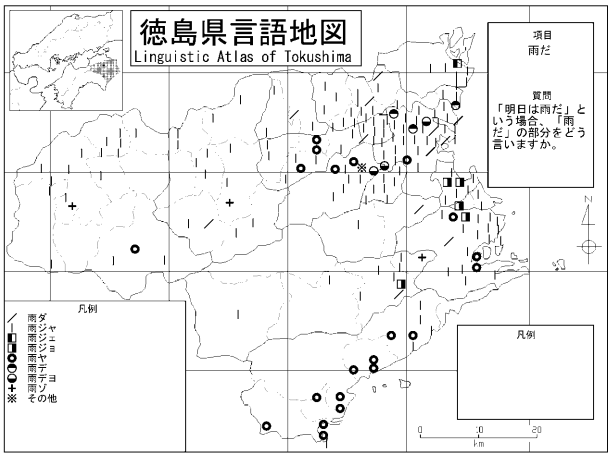

図７　仙波ほか（2002）「雨だ」

３．マチナニシタンジャ。（街で何かしたんだ）
　見能林町70代女性

⑵ ヤ

１．ウチノジーサンニモ　オハヨーユーンヤ。（家の爺さんにもおはよう［と］言うのよ）
　見能林町70代女性

２．オカネガ　ヨーケアッタンヤロナ。（お金がたくさんあったのだろうね。）
　見能林町70代女性

７）推量の助動詞

徳島方言では，推量の助動詞「だろう」を「ジャロー」と言う地域が山分にも広がっている。**図８**で阿南市を確認してみると，「ダロー」「ジャロー」の使用地域だということがわかる。今回の自然談話からは，「ヤロー」の使用が多くみられたが，「ジャロー」の使用も確認することができた。

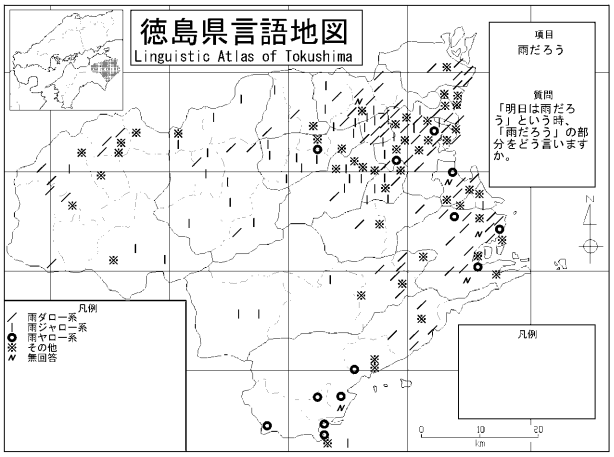

図８　仙波ほか（2002）「雨だろう」

１．ゴジハンダロ。（五時半だろう）
　見能林町70代女性

２．クルマイスデモ　イケルジャロナ。（車椅子でも行けるだろうね）
　見能林町80代男性

３．ネトッタンヤロネ。（寝ていたのだろうね）
　津乃峰町70代男性

８）可能の否定表現「ヨー／エー～ン」

阿南方言における不可能を表す表現として，「ヨー／エー」＋「動詞の否定形」がある。ヨーミン，エーミンと使うことがある。「ヨー」は「よく（能く）」「エー」は「得」の連用形が副詞化し，長音となったもので，ともに古語の副詞である。「ヨー」の使用は，多くみられたが，「エー」の使用は僅（わず）かになっているようだ。

１．キモチワルカッタケン　エーオリンカッタ。（気持ちが悪かったから降りれなかった）
　新野町60代男性

２．ヨーアルカンケンナ。（歩くことができないからね）
　見能林町70代女性

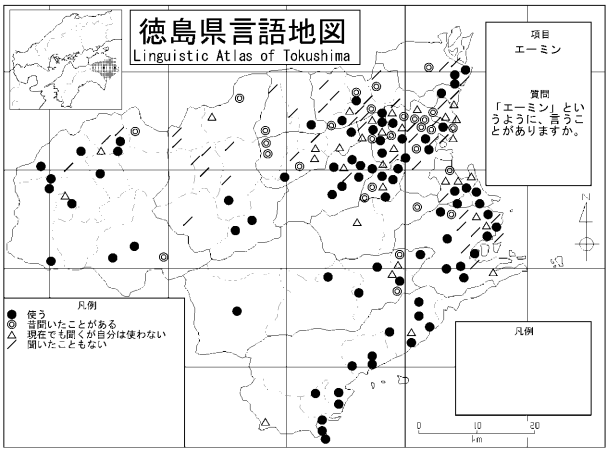

図９　仙波ほか（2002）「エーミン」

９）否定の助動詞

否定の助動詞は中国四国の方言では「～ン」が優勢であるが，徳島方言では東部域を中心に近畿方言と同様に，「～ヘン」の使用がみられる。阿南市においても，「～ヘン」の使用が多く確認ができた。しかし，「～ン」型の使用も確認することができた。

１．イッショーガモリナンテ　イエヘンノヤケンナ。

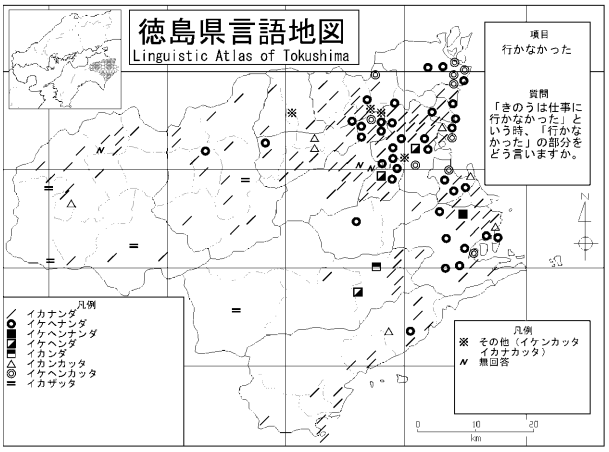

図10　仙波ほか（2002）「行かない」

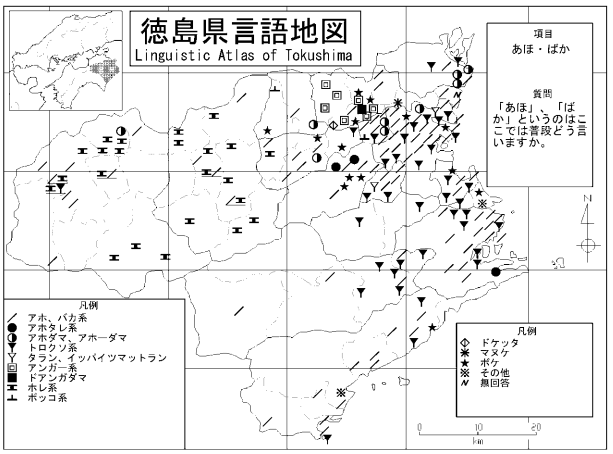

図11　仙波ほか（2002）「あほ・ばか」

（一升が森などと言えないのだからね）
見能林町80代女性

2．フレヘンノニ　ザーザーフッテ。（降らないのにザーザーと降って）
津乃峰町70代男性

3．ハモキョウセーセントナ　ハガクチカラ　ハミダシトルコヤ　オッタデ。（歯も矯正しないでね。歯が口からはみ出している子なんかいたよ）
見能林町70代女性

10）程度副詞（ヨーケ）

会話中にみられた，程度副詞は「ヨーケ」である。「ヨーケ」は，西日本に広くみられる程度副詞であり，余計・たくさん・非常になどと表すときに使用される。

1．スルヒトモ　ヨーケ　デテクルワ。（する人もたくさん出てくるね）
見能林町70代女性

5．語彙

1）アホ・馬鹿（ウットヌケ・トロクロ等）

アホ・馬鹿のことを何と言いますかと質問したところ，「ウットヌケ」「トロクロ」「トロクソ」をよく使うという回答を数多く得ることができた。図11をみると，徳島市内から南部にかけて，トロクロ系の使用が目立つ。今回の調査結果と一致している。

2）ウキャータイ（恥ずかしい）

阿波ことばで，「ウキャータイ」ということばがある。恥ずかしいことを指し，主に阿南市を中心にうわて地域で使用されている。見能林町の男性によると，主に富岡の人がよく使うそうだ。

3）オブケル（怯える）

阿波ことばで，驚くことを「オブケル（怯）」と言う。『万葉集』にもでてくる古語である。
かつては，徳島県全域で使用されていたが，今では主に高年層が使っており，使用が僅かになっている。今回の自然談話から確認することは出来なかった。

4）コザーナ（すごい・多い・大きい）

「コザーナ」は，徳島県南部で使われることばで，「すごい・多い・大きい」という意味で使われる。今回の調査結果では，コザーナの使用は僅かになってきているようである。また自然談話の中からは，確認することが出来なかった。

5）タウ（「届く」の意）

「タウ」とは，「届く，達する」という意の方言である。「棚に手がたう（棚に手が届く）」というように使用する。今回の調査で，使用するか尋ねたところ，使用すると答えたのは数人であり，使用が僅かになってきている。

6）ゴソオカク（山に入る）

「ゴソオカク」とは「山に入ること」の意であり，元々「ゴソ」とは雑草などの茂った所や草むらを指すことばである。川島・森（1979）が報告した『木頭村の方言』では，竹やぶのことを「ゴソ」と呼び，竹やぶのことを「ゴソヤブ」という。阿南市でも同じ意味あいで使われている。

1．ゴソニハイッタカラニ。（山の中に入ったからに）
新野町80代男性

7）ジブンク（自分の家）

自然会話中に，自分の家のことを「ジブンク」という使用例が確認できた。「ジブンク」以外には，自分の家のことを「ウチンク」という言い方もある。この「ク」は，「所，住み処」の意であり，四国方言の特徴として古くは「オルク（居る処）」「ソコナク（そのこ処）」のように使用されていた（金沢1976）。

1．クズガデルンデ　ソレオ　アゲテナ　ジブンクデ　タベタリ。（クズが出るのでそれを集めて自分の家で食べたり）
　新野町60代男性

8）メグ（痛める）

物をこわすことを，「メグ」という。ここでは体を傷つける，痛めることを指している。『日葡辞書』（1603－04）によると「Megui,u,eida（メグ）〈訳〉こわして崩す」と記載がある。

1．ミナ　コシメイドルワダ。（皆腰［を］痛めているじゃない）
　見能林町70代女性

9）ツム（人を乗せること）

車などに，荷を載せることを積むと使うが，ここでは人を車に乗せることを「ツム」という。以下が使用例である。

1．ヒトオ　ツンデイタゲレンモン。（人を乗せていってあげられないもの）
　見能林町70代女性

10）オッキョイ（大きい）

「大きい」は「オッキョイ」になる。図12によると，県南部に「オッキョイ」が分布し，阿南市の使用と一致している。

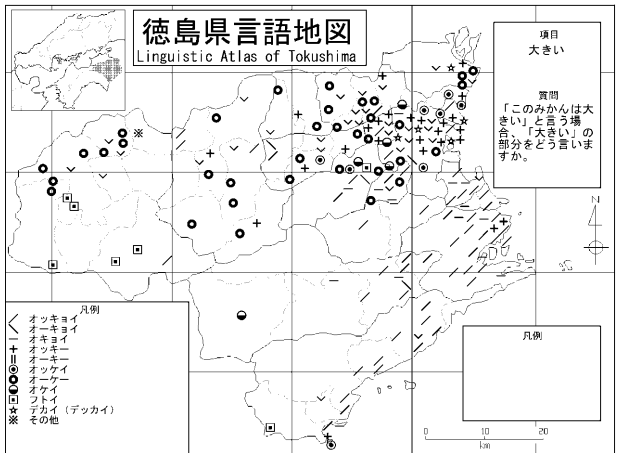

図12　仙波ほか（2002）「大きい」

1．オッキョイーゾッテ　オッキョイゾッテイヨルンミヨッテ。（大きいぞって　大きいぞって言っているのを見ていて）
　見能林町70代女性

11）ゴトマツ／ゴソマツ（蛙の方言）

大きい黒い蛙のことを，ゴトマツやゴソマツという。家の物置やジメジメしたところによく生息していた。家庭では，ゴトマツのことを家の守り神といい，子どもが苛めたらゴトマツが火を噴くぞといって，崇められていた。新野町では，「ごとまつさんのお墓」という言い伝えが残されており，現在もそのお墓は現存している。

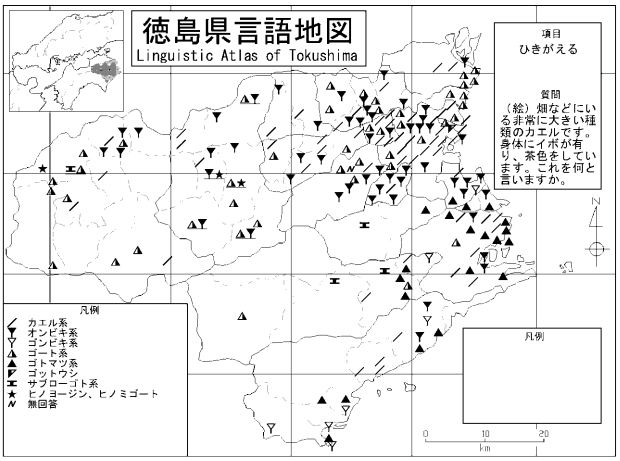

図13　仙波ほか（2002）「ひきがえる」

12）サンゲントビ（蛙の方言）

青蛙のことで，サンゲントビ【三間飛】という。アマガエルより少し大きく，昔は足の皮を剥いで食用としていたそうである。またサンゲントビという言い方は，『阿波ことばの辞典』には「サンゲン」と掲載されている。

13）ウシガエル（蛙の方言）

アマガエル科の蛙であり，食用蛙のことである。体長15センチから20センチくらいで，体色をみると雄は暗緑色，雌は褐色でともに黒褐色の斑紋がある。雄は牛に似た太い声で鳴くことから，ウシガエルと呼ばれている。新野町で聞いた話によると，池によく生息していて，年中泣き声は聞こえてくるそうだ。

14）トノサマガエル（蛙の方言）

アマガエル科の蛙であり，体長５センチから９センチくらいで，背面は緑色ないし褐色で黒色斑紋がある蛙のことを，トノサマガエルという。主に水田や池に生息していて，最近ではあまり見かけなくなったという。

15）ゴタロー（河童）

新野町では,河童のことをゴタローと呼んでいる。新野町の話者によると，実際見たことがないが，笠をかぶった人形みたいなのが川に生息していると昔よく聞いたそうだ。桑野公民館『文化財・お宝集』には，姉弟の「ごたろう」という説話が掲載されている。

６．談話資料

１）新野町で聞いた天狗の話

新野町の古川良夫氏より天狗の話を聞くことができた。以下に掲載する。

アノネ　テングデワナインヤケドモ。
あのね　天狗ではないんだけども。

アノナニ。マ，カゾクジャネ。
あの何。　ま，家族だね。

ゴヨッサンガキテ　ホシテアノソノゴヨッサンガ
養子さんが来て　　そしてあのその養子さんが

ホノ　オトーサンニ　モー　コトアルコトニ
その　お父さんに　　もー　事あることに

シカラレトッタワケヤネ。
叱られとったわけだね。

ホレデ　イッケオカンジテ　ホイデ　ユーガタ
それで　イッケを感じて　　そして　夕方

ホノテングノアルカッコーオシテ　ホイデ　アノ
その天狗のある格好をして　　そして　あの

イワノウエニ　タチイトッテ。
岩の上に　　立っていた。

ホイテ　オトウサンガ　コー　カエッテクルトキニ
そして　お父さんが　　こう　帰って来る時に

「オイコラマテ」ッテユッテ。
「おい　こら待て」って言って。

「ワシワドコソコノテングジャ」ットユーテ。
「わしはどこそこの天狗じゃ」っと言って。

「アノキクトコニヨルト　オマエワ　イエノムコニ
「あの聞くとこによると　おまえは　家の婿に

アノイジワルチューンカ　モーアルコト
あの意地悪というか　　もーあること

ナイコトユーテ　コラシメヨルンジャナイカ」ト。
ないこと言って　こらしめているのじゃないか」と。

モーコレカラ　ニドト　コンナコトシヨッタラ
もーこれから　二度と　こんな事していたら

コンドワコラエンゾ」ッテ　テングガ　ユータ
今度は堪えないぞ」って　　天狗が　　言った

ラシーケドネ。
らしいけどね。

「ハイ　テングサマノユートオリニシマス」ッテ
「はい　天狗様の言う通りにします」って

ホンデ　ホレカラ　ウッテカワッタ。
それで　それから　様変わりした。

ソンナ　イーツタエノハナシガ　アラタノニ
そんな　言い伝えの話が　　新野に

ノコットルネ。
残っているね。

２）桑野町で聞いた金の鶏の話

桑野町の西崎憲志氏より地元で伝承されてきた金の鶏の話を聞くことができた。以下に掲載する。

ムカシ　クワノニ　カネモチノノーカガアッタ。
昔　　桑野に　　金持ちの農家があった。

アルヒノユーガタ　ロクジュッサイオ　スコシ
ある日の夕方　　六十歳を　　少し

スギタクライノ　ジュンレーガ　タズネテキテ
過ぎたくらいの　巡礼が　　訪ねて来て

イチヤノヤドオ　モトメタ。
一夜の宿を　求めた。

シュジンワ　ショコクノ　メズラシーハナシガ
主人は　諸国の　珍しい話が

キケルトオモイ　ココロヨク　ヒキウケタ。
聞けると思い　快く　引き受けた。

ユーショクゴ　シュジンワ　ムカシカラ　ツタワル
夕食後　主人は　昔から　伝わる

ジマンノ　シナジナオミセタガ　ジュンレーワ
自慢の　品々を見せたが　巡礼は

カンドーセズ　フダン　シェオイバコノナカカラ
感動せず　××　背負い箱の中から

キンセイノ　ニワトリトカヤオ　トリダシタ。
金製の　鶏と蚊帳を　取り出した。

シュジンワ　コノハナシ　コノシナガ
主人は　この話　この品が

ホシクナリ　ジュンレーニ　ユズッテクレル
欲しくなり　巡礼に　譲ってくれる

ヨーニタノンダガ　ダメダッタ。
よーに頼んだが　駄目だった。

ドーシテモホシーノデ　アサハヤクオージノ
どうしても欲しいので　朝早く大地の

フチノ　トコロデマチブセシテ　タカラモノオ
渕の　所で待ち伏せして　宝物を

ウバイ　ジュンレーオ　キッテ　フルイフチノ
奪い　巡礼を　斬って　古い渕の

ナカニ　ケリコンダ。
中に　蹴り込んだ。

ソノトキ　フシギナコトニ　キンノニワトリワ
その時　不思議な事に　金の鶏は

シュジンノ　テノナカカラ　カナシー　コエオ
主人の　手の中から　悲しい　声を

ダシテ　ムコーノ　キリシトーノホーニ　ニゲタ。
出して　向うの　切石塔の方に　逃げた。

カヤワ　ソノゴ　シュジンノイエノモノガ
蚊帳は　その後　主人の家の者が

タイリュージニ　ホーモツトシテ　ホーノーシタ。
太龍寺に　宝物として　奉納した。

ジュンレーガ　コロサレタフチワ　ソノゴミズガ
巡礼が　殺された渕は　その後水が

ニゴリ　トジノヒトビトワ　ニゴリガフチト
濁り　土地の人々は　濁ヶ渕と

ヨンデイル。
呼んでいる。

イマデモ　ニゴリガフチト　ヨンビョル。
今でも　濁ヶ渕と　呼んでいる。

7．おわりに

今回の調査では，多くの方からご教示をいただくことができた。ご協力いただいた方々のお名前も伺えなかったほどであった。以下に，お名前を記録できた方々を記し（順不同，敬称略），ここにお名前を挙げることのできなかった方々も含めて感謝申し上げる。

渡来敬子，布川春重，美馬義明，柏木伊豆太，
長野薫，稲村耕作，宮田春子，池添芳生，湯浅淳，
丸山アサヱ，小野泰男，谷崎実美，日下旭，
古川良夫，中川裕美，服部常悦，西村彰悦，
前田敏武，西崎憲志，元山茂樹，神野米市，
小川敏郎

文献

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編（1998）：『日本語アクセント史総合資料研究篇』東京堂出版

阿南市史編さん委員会（2013）：『阿南市史　別冊　資料編』阿南市

阿南市見能林町見能方協議会（1985）：『見能方のいまとむかし』第一出版株式会社

新野喜楽連合会阿南市新野公民館編集（2000）：『竹香る文化と歴史のまち　あらたのふるさと昔話』鳥海印刷

新野町史編集委員会編（1926）：『新野町史』新野町

上野和昭編（1997）：『日本のことばシリーズ36　徳島県のことば』　明治書院

小野米一編（2001）：『国語学（現代語研究）報告７　徳島県阿南市における談話生活』鳴門教育大学国語学研究室

加藤信昭（1982）：「阿波の方言」『徳島の研究』第６巻

金沢治（1961）:『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館

金沢治（1976）:『阿波言葉の辞典』小山助学館

川島信夫・森重幸（1979）:「木頭村の方言」『総合学術調査報告　木頭村　阿波学会紀要　第16号』阿波学会・徳島県立図書館

岸江信介（2000）:「徳島県方言における理由を表す接続助詞の変容について」『20世紀フィールド言語学の軌跡』変異理論研究会

岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実（2010）:「徳島県吉野川流域アクセントの動態―吉野川流域南岸グロットグラム調査報告（2）―」徳島大学大学院国語学研究室

桑野公民館ふるさと研究会（2004）:『社寺・石造写真集ふるさとことば集』鳥海印刷

桑野ふるさと研究会（2013）:『文化財・お宝集』桑野公民館

国立国語研究所編（1967）:『日本言語地図』大蔵省印刷局

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）:『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室

土居重俊（1997）:「四国の方言」『四国方言考①（四国一般・徳島県・高知県』ゆまに書房

羽ノ浦町誌編さん委員会（1995）:『羽ノ浦町誌　民俗編』羽ノ浦町

藤原与一（1972）:「方言文末詞（文末助詞）の研究」広島大学文学部紀要　特輯号２

藤原与一（1985）:『昭和日本語方言の総合的研究第三巻　方言文末詞<文末助詞>の研究（中）』春陽堂書店

宮城文雄（1956）:「徳島方言概観」『徳島大学学芸紀要』５人文科学

森重幸（1962）:「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会資料

森重幸（1982）:「徳島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』図書刊行会

Dialect of "ex-Anan City", Tokushima, Japan

SAKOGUCHI Yukako*, KISHIE Shinsuke, SENBA Mitsuaki.
* 1-1 Minamijosanjima, Tokushima, 770-8502 JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No. 60（2015）, pp.163－173.